

機関番号：12102
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19330126
 研究課題名（和文） 大規模コホート調査に基づく気になる子どもへの早期支援プログラムの開発研究
 研究課題名（英文） Development and Evaluation of Early Intervention Program for difficult Children by a Large Cohort Study
 研究代表者
 安梅 勅江（ANME TOKIE）
 筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
 研究者番号：20201907

研究成果の概要（和文）：経年的な子どもの発達、社会適応、健康状態、問題行動の発現への影響を踏まえ、科学的な根拠に基づく「気になる子ども支援プログラム」の開発を目的とした。全国の0～6歳児と保護者約36,000組の12年間パネルコホート調査を用い、子どもの特性別に発達の軌跡と関連要因について分析した。その結果、家庭環境要因、子ども特性要因、家族特性要因、地域サポート要因の子どもの発達への影響の大きさと軌跡を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：With increasing numbers of women joining the extended-hour workforce, there is a need for quality childcare during these hours. This study sought to compare the effects of child environment on the development, adaptation, health, and problem behavior of 36,000 young children in care after twelve years. Parents completed a survey on the childrearing environment at home, their feelings of self-efficacy, and the presence of support for childcare. Childcare professionals evaluated the development of children. The results of multiple regression analysis indicate that factors in the home environment, not length of center-based care, explained developmental risks several years later.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2008年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2009年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2010年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
総計	13,800,000	4,140,000	17,940,000

研究分野：発達保健学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉

キーワード：気になる子ども 早期発見 早期支援

1. 研究開始当初の背景

(1) 少子化の進行とともに、子どもがすくすくと成長するための子育て環境への関心が高まっている。一方で、疲れやすい、易怒性、閉じこもりなど、社会的不適応の子どもの増大が心配されている。

(2) 日本では、子どものすこやかな発達、

社会適応、健康状態の維持増進、問題行動の予防に何が影響するのかを経年的な大規模調査により実証した研究は、きわめて乏しい状況である。

2. 研究の目的

(1) 経年的な子どもの発達、社会適応、健康状態、問題行動の発現への影響を踏まえ、

科学的な根拠に基づく「気になる子ども支援プログラム」を開発し、実用化のためのモデルを提案した。

(2) さらに気になる子どもの特性別に発達の軌跡と関連要因に関する学術的な知見を得るとともに、すでに開発済みの「保育の質の評価指標」に「気になる子ども支援プログラム」の内容を反映し、保育園、認定子ども園など、幼児期の支援機関における気になる子どもへの支援の充実を図ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 保護者と子育て支援専門職の気になる子どもの支援に関する実態把握、「気になる子ども」の社会性の発達軌跡と関連要因に関する既存データ追加分析を行った。

(2) 分析対象は全国の0歳～6歳児と保護者約36,000組であり、毎年3,000名ずつ平成11～22年の12年間パネルコホート研究を継続したデータである。調査内容は、保育環境、家庭環境、子どもの発達状態、健康状態、社会適応、問題行動、家族と子どもの属性などである。子どもの社会性の発達の軌跡を把握し「気になる状態」の統計的な根拠を得るため、子どもの特性別に発達の軌跡と関連要因について分析した。

(3) 影響要因としては、家庭環境要因（保護者とのかかわり、友人とのかかわり、社会的なかかわり、安全性、制限や罰の回避状況など）、保育環境要因（保育利用時間、保育開始年齢など）、保護者特性要因（周産期からの保護者のストレス、健康状態、就労、年齢など）、子ども特性要因（身体・精神面の健康状態、気質など）、家族特性要因（家族構成、きょうだいなど）、地域サポート要因（子育て支援の状態、連携など）などを採用した。

4. 研究成果

(1) 子どもの社会性の発達を3つの因子に類型化した「かかわり指標」を開発し、妥当性を検証し、今後の海外研究と比較検討が可能な客観的な評価手法を提案した。

(2) 大規模コホートデータを用いて軌跡分析を行い、子どもの健やかな発達に影響する要因を明らかにした。

多くの既存研究によると、子育て環境に必要な要素とは、安全で安心な状況のもとで、子どもへの身体的接触や言葉かけ、ほほ笑みや応答がタイミングよく愛情に満ちた形で一貫して提供されること、不必要な制限や罰が回避され、年齢相応の自主性を促す環境と豊かな外部社会や物的な環境があり、育児への

サポートがあることである。

世界各国の研究者と実践家により、望ましい子育て環境の要素について議論が続いている。100カ国以上ともっとも広く活用されている養育環境評価 HOME (Home Observation for Measurement of Environment) の枠組みは、以下の8領域が設定されている。本研究においても、8領域の重要性が示された。

①日常生活の中に多様性に富んだ人とのかかわりの機会があること

毎日の生活の中に、保護者や保育者、それ以外の人を含めて、子どもとのさまざまな形のかかわりがあること。たとえば、話しかけ、本を読む、歌を歌うなどさまざまな形で、それが子どもの発達に適合したものであること。

多くの場合、家庭においては、母親（的な役割の人）あるいは父親（的な役割の人）とかかわるが、少なくとも1日に1度は家族で食卓を囲み、家族みんなと接する機会を持つこと、また父親（母親）が多忙なため日常的にかかわることが難しい場合には、休日だけでも子どものために時間を作るなどの配慮が必要である。

さらに、子どもへの見守りを欠かさず、子どもに対する細やかな配慮があること。子どもの発達に対して、保護者として、また保育者としての役割を意識して対応していること。

②かかわりが情緒的で言語的な反応性に富んでいること

子どもの行動や言葉に対して、タイミングよく適切に反応することは、子どもの社会性の発達にとって必須の要素である。子どもから投げかけられるかかわりに対して、適切な言葉で愛情豊かな対応をすること。子どもの無意識な行動に対しても配慮していること。保護者や保育者自身が豊かな情緒性や言語性を持ち、自然な形で子どもに接していること。また、子どもがぐずる、泣く、危険な場面など、さまざまな状況に直面した時、十分な配慮に基づく適切な対応をすること。

③制限や罰が回避されていること

子どもへの否定的な感情の表現が制限や罰という形になりやすいことから、虐待の予防と早期発見に向けてきわめて重要な項目である。乳幼児期における制限や罰は、できるだけ避けることが望ましい。

日本では、しつけと称してたたいたり、きつい言葉かけなどがみられるが、しつけの意味の理解が難しい年齢においては、たたく、どなるなどの行為は行わないようにする。

また「あれをしてはいけない」、「そこに行ってはだめ」などの制限は、危険を避けたり、

著しく社会生活上のモラルに反する場合以外は、なるべく控えることが望ましい。

④年齢相応の自主性が尊重されていること

子どもの発達にともない、子どもが自分で考えて行動するよう配慮する必要がある。乳児期には動きやすい姿勢や衣服などへの配慮、自由に動き回る探索行動を許すなどが必要である。1歳6か月前後からは自分で選択するものを与えること、自分で遊び方を自由にさせるなどの主体性を持たせる工夫が必要となる。

具体的には、1歳6か月であれば自分の好きな食べ物や服を選ぶ、3歳程度になれば遊び方や過ごし方を自分で選ぶ機会を作る、などが例としてあげられる。

⑤子どもの発達状態に見合った物的な刺激（おもちゃなど）が存在すること

発達を促すさまざまなおもちゃが存在すること。特に身体を動かすおもちゃ、役割遊びのおもちゃ、空間利用のおもちゃ、組み立てることのできるおもちゃ、文字・映像・音のでるおもちゃなど、あるひとつの領域に偏ることなく、さまざまなおもちゃがあること。

特に、子どもが自由に使える状態に、おもちゃを用意していることが重要である。色彩、形状、大小などを自然に学び、自由に表現できる粘土やクレヨン遊びなど、多様な遊び内容、子どもの興味を広げるような機会を作ること。

さらに、水、がらくた、泥などを使った遊びに対する理解があること。しかし、テレビのつけっぱなしなど、かわりに乏しい刺激が長く続くことはないようにする。

⑥子どもの外出機会がありさまざまな外部社会に触れること

家庭の外に広がる社会は、子どもにとって家庭内では得られない新鮮な刺激となる。

少なくとも一週間に一度は買物に連れていくようにする。子どもにとっては、屋外のすべてが貴重な体験となるため、動物園で動物を見たり、郊外の自然に触れるなどが重要である。

また、隣人や親戚などの家を訪問する、あるいは訪問されることも、子どもにとっては社会的なかかわりの機会となる。特に、同年代の子どもとかかわる機会の確保は、社会性の発達においてきわめて重要である。

⑦子どもの発達に配慮した安全な環境が整備されていること

子どもの安全性に配慮するとともに、屋内において植物がある、ペットがいる、本が見えるところにあるなど、発達を配慮し、さまざまな刺激のある環境を作ること。地震など

緊急時にも危険がないよう、室内の整理整頓、落ちやすい状態で棚の上にもものを置かないなどの配慮をする。

⑧日常生活の中で育児に対する社会的なサポートがあること

主な保護者が母親（的な役割の者）の場合には父親（的な役割の者）の協力が重要となり、また、夫婦そろって取り組んでいる場合でも、夫婦間での育児に関する会話がなされていること、育児について相談できる友人などの存在、育児に関して先輩とも言うべき祖父母との意志の疎通、いざというときに子育てをサポートしてくれる人の存在などが重要である。

(3) 子育て・子育てエンパワメントの必要性

望ましい子育て環境とは、ひとりひとりの子どもの力を最大限に引き出し、生き生きとした子どもの育ちをはぐくむ、「子育てをエンパワメントする環境」である。

エンパワメントとは、力を引き出す、元気にすることである。子育てエンパワメントとは、「子どもの育つ力を引き出し、発揮させる」、すなわち「育つ力をはぐくむ支援」に最大限の力を発揮することである。それを支えるのが「子育て支援」であり、実現するための保護者や社会へのサポートが「子育て支援」である。

「気になる子ども支援プログラム」の効果的な実施に向け、「子育て環境の“質”の向上」「子育て・子育てサポート」「多様なニーズに対応可能な子育て環境の整備」をはじめ、子育て環境を支えるネットワークの拡大が求められる。根拠に基づく方法論を組み込んだ、子育てエンパワメント環境の実現が大いに期待される。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計42件）

① Anme T, Segal U. Child development and childcare in Japan, *Journal of Early Childhood Research*, 8(2), 2010, 193-210 査読有

② Anme T, Shinohara R, Sugisawa Y, et.al, Effectiveness of Japan's extended/night child care: A five-year follow up, *Procedia Social and Behavioural Sciences*, 2, 2010, 5573-5580 査読有

③ Anme T, Shinohara R, Sugisawa Y, et al. Trajectories of social competence by using Interaction Rating Scale (IRS) as an evidence-based practical index of children's social skills and parenting, *Journal of Epidemiology*, 20, 2010, 419-426 査読有

〔学会発表〕(計 39 件)

- ① Anme T. Cohort Study Methods, Manila Empowerment Conference, 2010.3.27, Manila (Philippine)
- ② Anme T. Community Empowerment: Aging in Place. Sweden Society, 2008.12.14, Jonkoping (Sweden),
- ② Anme T. Bridge between Mind and Education: Evidence from Longitudinal Research on Child Care Environment and Child, 1st Asia Pacific Conference on Mind, 2008.9.23 Nanjing (China),

〔図書〕(計 11 件)

- ① 安梅勅江、日本小児医事出版、子育て子育てエンパワメントー子育て環境評価と虐待予防一、2009、120
- ② 安梅勅江、山川紀子、矢藤優子、塩川宏郷他、日本小児医事出版社気になる子どもの早期発見と早期支援ー「かかわり指標」を活用した根拠に基づく子育て・子育て支援に向けて一、2009、98
- ③ 安梅勅江、日本小児医事出版、保育パワーアップ講座 活用編ー根拠に基づく支援子どもたちのすこやかな成長のために一、2008、150

〔その他〕

ホームページ等
保育パワーアップ研究会
<http://square.umin.ac.jp/Child/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安梅 勅江 (ANME TOKIE)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：20201907

(2) 研究協力者

田中 裕 (TANAKA HIROSHI)
大宝保育園・園長

酒井 初恵 (SAKAI HATSUE)
小倉北ふれあい保育所主任保育士

宮崎 勝宣 (MIYAZAKI KATUNOBU)
路交館あすなろ保育園・主任保育士

小林 昭雄 (KOBAYASHI AKIO)
みのり保育園・保育士

天久 薫 (AMAHISA KAORU)
どろんこ保育園・理事長

枝本 信一郎 (EDAMOTO SINITIRO)

路交館聖愛園・理事長

伊藤 澄雄 (ITO SUMIO)
飛島村すこやかセンター・係長

篠原 亮次 (SHINOHARA RYOJI)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・研究員

杉澤 悠圭 (SUGISAWA YUKA)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

澤田 優子 (SAWADA YUKO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

童 連 (TONG LISN)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

田中 笑子 (TANAKA EMIKO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

冨崎 悦子 (TOMISAKI ETSUKO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

望月 由妃子 (MOCHIZUKI YUKIKO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

渡辺 多恵子 (WATANABE TAEKO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

恩田 陽子 (ONDA YOKO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

徳竹 健太郎 (TOKUTAKE KENTARO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

平野 真紀 (HIRANO MAKI)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

森田 健太郎 (MORITA KENTARO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

Amarsanaa Gan-Yadam
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

川島 悠里 (KAWASHIMA YURI)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

難波 麻由美 (NANBA MAYUMI)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

呉 柏良 (WU BAILIANG)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

丸山 昭子 (MARUYAMA AKIKO)
埼玉県立大学・講師